

Title	Macular Microstructures and Prognostic Factors in Myopic Subretinal Hemorrhages
Author(s)	浅井, 智子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55810
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論 文 内 容 の 要 旨
Synopsis of Thesis

氏 名 Name	浅井 智子
論文題名 Title	Macular Microstructures and Prognostic Factors in Myopic Subretinal Hemorrhages (強度近視眼の脈絡膜新生血管を伴わない黄斑下出血の光干渉断層計所見と予後)
論文内容の要旨	
<p>〔目的(Purpose)〕</p> <p>強度近視の脈絡膜新生血管を伴わない黄斑下出血の患者13例13眼を、6か月間経過観察し、スペクトラルドメイン光干渉断層計(SD-OCT)所見と視力経過について検討した。</p>	
<p>〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕</p> <p>発症後6か月で、12眼(92.3%)で有意に視力改善を認めた。出血吸収までの期間が長いほど最終視力は有意に低かった($P < 0.01$)。SD-OCT画像では、発症時、出血は全例で網膜内に侵入しており(外顆粒層まで; 23.1%、内境界膜まで; 38.5%、外顆粒層～内境界膜まで; 38.5%)、網膜内出血侵入部は6か月後も網膜神経線維に沿う高輝度信号として残存した。6か月のSD-OCTで、視細胞内接・外節ライン(IS/OS)欠損($P < 0.01$)および外境界膜ライン(ELM)欠損($P < 0.05$)があれば、有意に最終視力が低かった。IS/OSライン欠損と6か月時ELMライン欠損は有意に関連し($P < 0.001$)、ELMライン欠損は出血吸収期間と正に相関した($P = 0.03$)。同時に高輝度信号の高さは、IS/OSライン欠損と正に相関した($P = 0.03$)。</p>	
<p>〔総括(Conclusion)〕</p> <p>強度近視の脈絡膜新生血管を伴わない黄斑下出血は網膜外層に侵入し、癒痕化したものがOCTの高輝度信号として残存すると考えられる。発症後の視細胞レベルの修復が視力予後に関与すると考えられる。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 浅井 智子		
論文審査担当者	(職)	氏 名
	主 査	大阪大学教授 西田 幸二
	副 査	大阪大学教授 猪俣 啓典
	副 査	大阪大学教授 不二門 尚
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>本論文は、近視性単純出血 (mSH) の形態的特徴及び視力予後について検討したものである。</p> <p>mSH13眼の6か月間の経過観察で、初診時視力と発症後6か月の比較では有意に視力改善した。また、出血吸収期間が長いほど最終視力は有意に低かった。</p> <p>光干渉断層計 (OCT) 所見では、発症時、全例で出血の網膜内侵入を認め、網膜内出血侵入部は6か月後も網膜内高輝度信号として残存していた。</p> <p>画像所見と最終視力の相関では、6か月時、視細胞内接外節接合部ライン (IS/OS) 断裂および外境界膜ライン (ELM) 断裂を有する症例で有意に最終視力が低く、さらにELMライン断裂は出血吸収期間と正に相関した。また、6か月後に見られた網膜内高輝度信号の高さは、IS/OSライン断裂と正に相関した。</p> <p>以上、mSHは網膜外層に侵入し、瘢痕化したものがOCTの高輝度信号として残存すること、発症後の視細胞レベルの修復及び回復期間が視力予後に関与するという新たな知見を示したことから、本論文は学位論文に値する。</p>		